

指示されている対象とその名前の正しさについて

久保田 進一

1. はじめに

人間にとって、言語を使用することは他の動物と区別される一つであると考えられている。その際、「言葉」はギリシア語ではロゴス (logos) であり、その意味は「理性」でもあり、人間が「理性的動物」と言われる所以でもある。それだけ、人間と言葉の関わりは深いのであり、これまでも言葉に関しては哲学的な問題として様々に議論されている。とりわけ、言語論的転回が起こったからといって、言語について哲学的に議論されるようになったというわけではないし、言語論的転回以前から言語についての分析や議論はあったのである。それは古代から中世、さらには近世にかけて問題にされていたことである。

さて、言語に関する問題には、名前と指示されている対象の関係についての問題があり、さらには意味とは何かという問題が、フレーゲ以降、言語哲学の中心的な問題であることは、周知のことである。これまでもいろいろな哲学者達が「意味とは何か」という問題に何らかの回答を与えてきた。例えば、フレーゲの意味 (Bedeutung) と意義 (Sinn)、ウィーン学団による「命題の意味とはその検証方法である」、ウィットゲンシュタインの「語の使用がその意味である」等々である。

ところで、このように意味についての話はいろいろとあるが、もう少し遡って、次のことを考察してみたいと思う。つまり、意味云々以前に、指示されている対象と名前が何故、正しいとされるのかという問題である。さらに言えば、名前が対象をうまく指示している根拠は何なのか、ということである。もちろん、正しく指示されていない場合には、間違っているのであるが、正しく指示されている場合の根拠は、何であるのかということである。

本稿においては、プラトンの『クラテュロス』の議論から始まり、聖書に見

られる言葉に関するエピソード（アダムの命名の話・バベルの塔の話）を通して、名前の正しさについて考えていきたいと思う。さらには、ウィットゲンシュタインの私的言語の問題にまで踏み込んでいこうと思う。それによって、私的言語の不可能性は本当なのだろうかということも考察していこうと思う。

2. 『クラテュロス』からの議論

さて、哲学の問題として、言語の問題が議論された最初の文献は、おそらく、プラトンの『クラテュロス』であろう。そこで、問題となっているのは、副題にも見られる「名前の正しさについて」である。つまり、指示している対象を名前が正しく表しているかどうかという問題が論じられており、その正しさの理由が探求されている。『クラテュロス』においては、『ソクラテスとクラテュロスとヘルモゲネス』が議論する。全編は二部に分かれるが、第一部ではソクラテスとヘルモゲネスが対話し、ヘルモゲネスの立場（名前の正しさは各個人の自由な取り決め）をソクラテスが反駁し、名前の正しさは本性的であることを論証する。第二部では、ソクラテスとクラテュロスが対話し、クラテュロスの主張（名前の正しさは本性的なもの）に対し、ソクラテスは現実には名前の正しさはある程度使用者間の取り決め依存することを説明する。

まずは、ソクラテスとヘルモゲネスの議論を見てみよう。

2.1. 言語は規約に従うのか

ヘルモゲネス ではどうだろう、こちらのソクラテスにも、われわれの論争点をお話して、議論に加わっていただければ。

クラテュロス 君がよければ、どうぞ。

ヘルモゲネス こちらのクラテュロスがね、おおソクラテス、こう主張するのです。名前の正しさというものは、それぞれの有るものに対して、本来本性的に[自然に]定まっている。そして名前とは、幾人かの人々がそう呼ぶことを申し合わせて[取りきめて]、自分たちの言語の一部分として発音することによって、呼んでいるものなのではなくて、何か名前の正しさというものが本性的に[自然に]存在しているのであり、それはギリシア人に

も外国人にも万人に同一のものなのであると、このように彼は主張するのです。そこでぼくが彼に質問しました。クラテュロスという名前は、真実に彼の名前であるかどうかとね。彼はそうだと肯定しました。「ではソクラテスには何という名前があるのか」とぼくがたずねますと、「ソクラテスという名前だ」と彼は答えました。「それでは、その他のすべての人間のばあいも、われわれが彼ら一人一人呼んでいるまさにその名前が、各人の名前であるのではないか。」これに対して彼は「いや、少なくとも君にだけは“ヘルモゲネス”が名前ではないよ。たとえ世界中の人間が君をそう呼んだとしてもね」と言いました。そしてぼくが、いったい彼が何を言おうとしているのか、問いただし、理解しようと一生懸命になりましても、彼は明確なことを何も言わないばかりか、思わせぶりな態度でぼくをからかうのです。(383a1-384a1)

このようにして、『クラテュロス』は始まる。ここで、ヘルモゲネスが理解しようとしても納得できないことが、クラテュロスの言動なのである。確かに、クラテュロスは、自分の名前やソクラテスについては真実の名前であると認めているのに、ヘルモゲネスだけには、認めていないのである。世界中の人間がヘルモゲネスを“ヘルモゲネス”と呼んでも、それは誤りだというのである。ここに、クラテュロスの立場がよく表れている。つまり、クラテュロスの立場は、言語实在説(言語自然説)という立場であり、名前は自然本来的に、存在するものに適合、合致するようにできていると考える立場である。そのため、クラテュロスがヘルモゲネスを正しい名前ではないというのには、理由がある。それは、“ヘルモゲネス”という語の意味は「ヘルメス神から生まれた者」、「ヘルメスの子孫」という意味なのであり、クラテュロスがヘルモゲネスに対して正しくないというのは、ヘルモゲネスがそれらの意味に相応しくないからである。それは、ヘルモゲネスが貧乏だったということからである。このことは単なるクラテュロスのからかいと見て取ることもできるが、クラテュロスの立場は名前と事物は本来適合しているものと考えているので、自分の説から当然、この帰結が出てくるのである。

一方、ヘルモゲネスの立場は「名前とは、幾人かの人々がそう呼ぶことを申し合わせて[取りきめて]、自分たちの言語の一部分として発音することによって、呼んでいるもの」であるという立場である。つまり、主観説あるいは規約・

慣習説という立場であり、言葉は人間によって自由に変えられるという考えである。したがって、あるものを馬と名づけても犬と名づけても、その名前はその人にとっては正しいというのである。ヘルモゲネスは、この根拠には、奴隷の名前を名づけることを例として挙げている。

ヘルモゲネス ええ、結構ですとも。[それではぼくの意見を申しませんが]ぼくとしてはですね、おおソクラテス、これまで実に度々、この人とも、また多くの人たちとも語りあったのですが、取りきめ[約束]と同意以外に、何か名前の正しさ[規準]があるなどとは、どうしても納得できないのです。なぜなら、ぼくにはこう思えるのです。だれかが何かにどんな名前でもつけたならば、それがそのものの正しい名前であるのだ。そして、もしそのあとになってですね、その人がそのものに別の名前をつけ換えて先の名前ではもう呼ばなくなったら、今度はあとの名前が先に劣らず正しい名前となったのであり、それはちょうどわれわれが召使い[奴隷]たちの名前をつけ換えるばあいと同様である。なぜならば、本来それぞれのものに本性的に定まっている名前なんて、全然ありはしないのだから。むしろ名前は、それを言い慣わし、呼んでいる人々のしきたりと慣わし[慣用]によってできあがるものであると、このようぼくには思えるのです。(384c9-d8)

以上のように、ヘルモゲネスは名前は慣習あるいは約束事によって決まっていると言うのである。これに対し、ソクラテスは次のようにヘルモゲネスに問いかける。

ソクラテス ではどうだろう。ぼく個人が有るものを何であれ、例えば現在われわれが人間と呼んでいるものをだね、それをぼくが馬と呼称することにして、そして現在馬と呼ばれているものを人間と呼ぶことにするならばだ、同一のものに対して公共的には人間という名前があり、私的には馬という名前があることになるだろうね。また逆に、私的には人間と呼ばれるものが、公共的には馬と呼ばれることになるだろう。君が言わんとしているのは、そういうことかね。

ヘルモゲネス ええ、ぼくにはそのように思えるのです。(385a6-b1)

ここで、ヘルモゲネスは慣習あるいは約束によって決まっているということ

以上に、名づけた人にとって名前は正しいという極端な主観説を主張することになる。そして、ある意味、名前における相対主義をとることになる。それは次の箇所です。

ソクラテス さてそれでは、どんなものにも各人が、これが名前だと言ったら、それがそのものの名前であるのだね。

ヘルモゲネス そうです。

ソクラテス そもそもまた、人それぞれのものに、いくつであろうとも、言った[つけた]だけの名前が、またいつであろうとも、言った時に、そのものの名前であるということになるのだろうか。

ヘルモゲネス もちろんです。なぜなら、[すでに申しましたように]ぼくはですね、おおソクラテス、名前の正しさ[規準]としては、これ以外のものを知らないのですから。すなわち、ぼくはぼくがつけた名前でそれぞれのものを呼ぶことができますし、またあなたはあなたのおつけになった別の名前ですね。同様に国家の場合も、同一の事物にいくつかの国家がそれぞれ独自の名前をつけている事実をぼくは見ます。あるギリシア人の国家が別のギリシア人の国家と、またギリシア人の国家が外国人の国家と、異なる名前をつけているのです。(385d2-e3)

ここでは、個人の主観説を言いながらも、言語によって異なる名前になっていることが主張されている。この点に関しては、納得いくことであろう。しかし、個人のレベルに命名の規準を置くことには違和感が生じるのである。しかし、ヘルモゲネスもソクラテスも最初に名前をつけた人（命名者あるいは言語の発明者あるいは言語の制作者）の存在を前提としているので、主観説を主張することも理解できるだろう。しかし、ヘルモゲネスとソクラテスは同じように言語の発明者を想定しているが、両者の考えは異なってくるのである。むしろ、両者の対話によってヘルモゲネスの最初の考えが退けられていく。

それは言語を一つの道具として、考えるところから始まる。この考えには、機織との類比が関連しているのであるが、言語を道具として考えると、そのためには何らかの目的がなくてはならないことになる。そして、その目的に合うために機能が重要視されるのである。道具という存在はある目的にあってこそ、

その道具の存在理由（レゾンデートル）があるからであり、機能性はそのためにも重視されるのである。ヘルモゲネスの最初の議論は個人が勝手に名前をつけたら、名前をつけた人にとっては、その名前は正しいというものであった。しかし、それでは、言語の機能性はもとより、言語を道具として考えた場合、その目的は意味をなさなくなってしまう。したがって、ソクラテスの立場から言えば、言語を道具と考えるのであれば、目的があり、勝手気ままに言語は作られたものではないということになる。

このあと、言葉の語源分析をして、音声についての分析を始めるのである。例えば、子音の *r* は、あらゆる動き（*kinēsis*）[を表現するため]の道具であるとし、運動を模写するにはかっこうの道具だと名前を定めた人は思ったのだと、ソクラテスは考えるのである。実際、ギリシア語を見ると、「流れる（*rhēin*）」・「流れ（*rhoē*）」・「震え・揺れ（*tromos*）」などの語に、この *r* が現れているとする。a（アルパ）と ē（エータ）は大きいという理由で、a（アルパ）を「大きい」ものとし、ē（エータ）を「長さ」にあてがったのである、とする。さらには、「丸い」ものを表すしとして o（オウ）を必要としたのである、としている。結局、ソクラテスはヘルモゲネスとの議論から以下のような結論を出す。

ソクラテス（前略）そしてその他のもの [事物、概念]についても同様で、立法者はそれら [事物、前例だと「大きい」]を文字 [例、a]にも綴 [例、mega]にも [似通ったものに]当てはめることによって、それぞれの有るものに対するしるし、つまり名前を作ったのであるらしいね。そしてそのあとで、今度は残りのもの [派生的な名前]を、今作ったこれら [最初の名前]そのものを用いて合成したのだろうね。[やはり事象を]模写しながらね。以上がね、ぼくには、おおヘルモゲネスよ、名前の正しさがそれであろうと目指しているところのものなのだ見えるのだよ、もしもこちらのクラテュロスが何か違ったことを言うのでないかぎりね。(427c6-d2)

2.2. 言語は事物の本性を表すのか

さて、『クラテュロス』の作品の中のもう一つの議論を見てみよう。こちら

はソクラテスとクラテュロスの議論となる。こちらはヘルモゲネスの議論と異なり、ある意味、ソクラテスが今度は規約説の立場に立ち、クラテュロスの言語実在説（言語自然説）に論駁していく形になっている。では、ソクラテスとクラテュロスの議論を見てみよう。

ソクラテス おお善なるクラテュロスよ、実際ぼく自身も先刻からわれとわが知恵に驚嘆して、信じられないでいるところなのだよ。それで、いったいぼくは何を言っているのか、再吟味しなければならないように、ぼくには思えるのだ。なぜなら、自分が自分によってだまされるということは、何よりも危険なことだからねえ。なぜなら、だましてやろうと狙っている者が東の間も離れないで、しょっちゅう付きまとっているとするならば、どうして危うくないことがあろうか。だからしてわれわれは、すでに語られたことをしばしば振り返って、あの詩人のことばを借りるならば、「先をも後をも共に」眺め渡すよう努めるべきだと思われる。そこで目下の場合もわれわれは、われわれによって言われたことは何であるかを、見てみようではないか。名前の正しさとは、われわれが主張しているところでは、当の事物がどのようなものであるかを示すであろうところのものである。これでもう十分に説明されていると、われわれは言うべきだろうか。

クラテュロス ええ、ぼくには実に申し分のないように[説明されていると]思えますね。おおソクラテス。

ソクラテス してみると名前が言われるのは、教示のためなのだね。

クラテュロス 確かにそうです。

ソクラテス ではわれわれは、これ[教示]もまた一つの技術であって、それに関する工匠[制作技術者]が存在すると、言うべきではないかね。

クラテュロス 確かにそうですね。

ソクラテス それはだれかね。

クラテュロス あなたが最初におっしゃっていた人たち、つまり立法者です。
(428d1-429a1)

ここでの対話を見ても分かるように、結局、クラテュロスも名前を制作する人を認めることになる。しかし、問題は名前を制作する人を認めても、その人が何を意図して、何を目的として名前を制作したのかということなのである。

クラテュロスの立場からすれば、名前と事物（指示される対象）は一致するようになっているからである。そこで、ソクラテスは言語と絵の類比関係を示して議論を続けていく。

ソクラテス よろしい。それではどうにかしてわれわれが合意点に達することができるものかどうか、いざ考えてみようではないか、おおクラテュロスよ。いったい君は、名前と名前がその名前であるところのものとは、それぞれ別個のものであると、認めるのではないだろうか。

クラテュロス ええ、認めます。

ソクラテス それでは、名前は当の事物の一種の模造品であるということにも、君は同意するのではないかね。

クラテュロス もちろん、何よりも[そのことに同意します]。

ソクラテス それでは、絵もまた、ある別の仕方、ある種の事物の模造品であると、君は言うのではないかね。

クラテュロス そうです。

ソクラテス さあ、それでは調べてみようではないか。というのも、多分ぼくには君が言おうとすることがいったい何であるのか、分かっていないのであって、君の言っていることはおそらく正しいのだからね。これら両種の模造品、つまり絵とさっきの名前とのどちらをも、これらがその模造品であるところの事物に割り当て結びつけるということは、できるのかね、できないのかね。

クラテュロス できます。

ソクラテス ではまず第一に次の場合を考えてみ給え。いったい人が男の肖像画を男に帰属させ、女のを女に帰属させ、またその他の場合も同様にすることができるだろうか。

クラテュロス もちろんです。

ソクラテス それではまた、その反対に、男の肖像画を女に、女のを男に、帰属させることもできるのではないかね。

クラテュロス それも可能です。

ソクラテス ではいったいこれらの割り当ては、両方とも正しいのだろうか。それとも片方だけがかね。

クラテュロス 片方だけです。

ソクラテス それは、ぼくの思うに、それぞれのものに、それにふさわしいもの、つまり似ているものを帰属させる方なのだ。

クラテュロス ぼくにはそうだと思います。(430a6-c14)

ここで、ソクラテスは肖像画と名前を類比させて、肖像画がある個人に誤って結びつけられるように、名前が誤って結びつけられるときもあることを認めさせ、正しく結びつけられるという場合は、肖像画にしても名前にしても「それぞれのものに、それにふさわしいもの、つまり似ているものを帰属させる」という場合になることになる。さらに、議論は続き、綴と文字を用いて事物のありかた（本質）を写し取る人の話に進む。そこで、ソクラテスはその事物を正確に写し取って、模写品を制作する、すなわち名前にするのできる人の中にも上手にできる人と下手な人がいることを言うのであるが、クラテュロスはこの意見には納得しないのである。つまり、クラテュロスの立場では名前を正確に綴ることのできる方法の一つであり、それ以外はもうそれはその事物を表していないくて、別の事物を表すことになってしまうからである。クラテュロスの立場では、上手か下手かの程度の問題ではなく、そのものを表しているか別のものを表しているかのいずれかなのである。しかし、ソクラテスはこのクラテュロスの意見が誤っていることを指摘する。

ソクラテス 有るか有らぬかを必然的にある数に依存しているかぎりのものは、多分君の言っているような、そういう目に会うことだろうね。ちょうどまた数自身にしてからが、十だって他のどんな数だって、もし君が何らかの部分を取り去るか付け加えるかすると、それでもうただちに別の数になるようにね。他方、性質的なものと[そのうちで今問題になっている]あらゆる種類の模写物のばあいには、その正しさ[正しいものであることの規準]はそういうものではなくて、むしろ反対に、模写物を得ようとするならば、われわれは、そもそも原物であるものもっている形質をすべてそれに帰属させる[再現させる]ということが、そもそも許されてすらいけないのではなかろうか。ぼくの言うことに一理あるかどうか、考えてくれ給え。次のようなものは、クラテュロスとクラテュロスの模写品という意味での二つの事物であるだろうか。すなわち、だれかある神が、画家のように君の色と形を写し取るばかりか、内部のすべてをも君のとそっくり同じように作り、柔らか

さと温かさと同じものを再現し、動きと魂と思慮も君の所にあるようなのを入れ、要するに、君がもっているすべてのものとそっくりのものを別にして君の側に置けばいいにね。どうだね、そのときこのようなものは、クラテュロスとクラテュロスの模写品なのだろうか、それとも二人のクラテュロスなのだろうか。

クラテュロス 二人のクラテュロスだと、ぼくには思えます、おおソクラテス。

ソクラテス それご覧、わかっただろう、おお友よ、模写品と[したがってまた]われわれが今も話していたもの[つまり名前]の正しさとしては、[君が言っていたのとは]違ったものを求めなければならないのだということが。そして、何らかの部分が欠如していたり、付け加わっていたりするならば、もはやそれは[当の事物の]模写品でないことが必然的である、と考えるはならないのだということがね。それとも君は、いかに模写品が原物であるものと同じもの[形質]をもつにはほど遠いか、まだ悟らないのかね。

クラテュロス わかります。(432a8-d4)

ここで見られるように、クラテュロスの主張では、名前と対象の区別がつかなくなってしまう。そういうわけで、クラテュロスは言い伝えによると、言葉に対し深い疑念をもってしまい、ついには全く語らず、ただ身振りだけで伝達をしていたことになっている。名前と原物を異なるものとして認め、名前を模写したものとして考える限り、そこには類似性という点に関係してくるのである。もし類似性を認めないのであれば、名前は必要なくなり、まさに、クラテュロスのように身振りで伝達することになってしまう。しかし、類似性を認めてしまうと、ヘルモゲネスと同じ慣習説に立ってしまうことになるのである。

結局、ソクラテスのここでの結論は、日常言語にはある程度、約束事・慣習的なものが入っているということになる。ヘルモゲネスと議論していた際には、名前は事物の本性を表すとして、慣習説には反対していたがクラテュロスとの議論では、ある程度の慣習を認めることになる。ソクラテスの立場は捉えにくいだが、少なくとも言語がコミュニケーションの道具であることは認めているのであり、そこには公共性というものを前提にしているように思われる。ただし、言語の制作者が言語を制作したときに何を目的としていたかは、この作品では見いだすことはできない。むしろ、『クラテュロス』の作品全体の結論は、「結局は、語の分析だけをいくら重ねても、人間はものの真実にはふれることはで

きないのであるから、語や名前にとらわれない知識、あるいは「名前（オノマ）なき知」の立場が必要であるという暗示的な説の提出で、この対話編は終る¹とされている。結局、プラトンにおいては語の分析よりもアイデアを魂によって捉えることが真実を捉えることなのかもしれない。

3. 『旧約聖書』の喩え

3.1. アダムの命名

ここで、『旧約聖書』の「創世記」に見られる名前のつけられ方を見てみよう。それは、アダムが獣に名前をつける箇所である。

「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった」²

この箇所は、神が「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」³と思ったことがきっかけである。そのため、アダムの前に、あらゆる獣や鳥を連れてきて、アダムに名前をつけさせたのである。したがって、ここでの第一の目的は獣に名前をつけることではなく、アダムのパートナーを見つけることであった。その際に、獣に名前をつけることが派生的に行われたのである。しかし、ここで、アダムが獣に名前を自由に与えているのは、固有名詞なのかそれとも一般名詞なのかという問題がある。そもそも、アダムがつけているのは、単に名前であって、固有名詞と一般名詞の区別がないように思える。つまり、アダムはそれぞれの獣に名前を与えているのであるが、それはわれわれが犬にポチとかネコにタマとつけていることと状況はほとんど変わらない。むしろ

¹ 齊藤忍随『プラトン』岩波新書、1972年、189-190頁。

² 「創世記」第2章第19-20節、『聖書 新共同訳』所収、日本聖書協会、1987年。

³ 「創世記」第2章第18節。

ろ、アダムがつけた固有名詞が、後に一般名詞になっただけのことなのではないだろうか。つまり、アダムの命名はクリプキの言う固定指示子を与えたことになる⁴。

また、このアダムの行為は、ある意味、プラトンの『クラテュロス』の命名者（言語の発明者あるいは言語の制作者）と見て取ることもできる。しかも、何のために名前をつけたのかというと、その目的ははっきりしていない。というのも、通常、言語が他人とのコミュニケーションの道具と考えられるのであるが、アダムが獣に名前をつけたときには、アダム以外には人は存在していなくて、まだエバすらも存在していなかったのである。もちろん、アダムを作った神は存在していたが、アダムは神とコミュニケーションをとるために、獣に名前をつけたとは思えない。したがって、アダムの話は『クラテュロス』における最初のヘルモゲネスの立場がよく表されている。まさに、勝手気ままに獣に名前をつけ、名前をつけたアダムにとっては、その獣の名前は正しいと言えることになる。

3.2. バベルの塔

もうひとつ、『旧約聖書』中の言語に関する記述の有名な話がある。それが、バベルの塔の話である。

「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにして

⁴ アダムがそれぞれの獣に名前をつけたのは、固有名であると考えても、自然種の名前と考えても、いずれにしてもクリプキの言う固定指示子に変わりはないだろう。

しまおう。」主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。」⁵

このバベルの塔の話はよく一言語社会から多言語社会へと移っていったことを象徴しているとされている。つまり、アダムの時代には、一言語で足りていたのだが、時代が下って、多言語になったことを表しているとも言える。また、プラトンの『クラテュロス』で見られたように、最初に言葉を発明した人の存在や「創世記」のアダムの話が本当であれば、我々の現実の世界に言葉がたくさんあふれていることはおかしいことになる。それは、古代のギリシア人やヘブライ人もわかっていたことである。そこで、このようなバベルの塔の話が出てきたとも考えられるのである。

しかし、もう少しこの話を拡大してみると、結局、言語は相手に通じなかったら、意味がないということであり、道具としては全く機能しないということになる。そのため、それまで、同じ言語であったために、天まで届く塔を建設していたのに、人々は塔を建設することを放棄してしまったのである。つまり、言語は相手に通じてこそ、言語としての役割を果たすということである。

言語の機能という観点から言えば、アダムが獣に名前をつけることとバベルの塔の話は、状況が全く対照的と言える。つまり、アダムの時には、私的言語が可能であった状況であり、アダムが獣に名前をつけることは、まさに『クラテュロス』でのヘルモゲネスの最初の立場だった。それに対し、バベルの塔の話では、このような立場は退けられることになる。人々がそれぞれの言語を話していても、通じなければ意味がないし、言語の役割は果たすことはできない状況になっている。アダムの状況とバベルの塔の状況では、他者の存在が大きな差を生じさせている。

4. ウィットゲンシュタインの私的言語

⁵ 「創世記」第11章 第1-9節。

さて、私的言語といえば、ウィットゲンシュタインの『哲学探究』に出てくる「感覚日記」であろう⁶。つまり、ただひとりの個人によって考案され、その人のみに理解されるという言語が私的言語であるが、そのような言語は存在し得ないというものである。このことは、言語は本質的に公共的であるということを主張しているのであり、私的であることは言語の役割を果たさないことを示している。

さて、これまでの『クラテュロス』や『旧約聖書』の話から強引にウィットゲンシュタインの私的言語に結びつけるのであれば、私的言語は可能かどうかという問題に踏み込むことになる。ただ、ウィットゲンシュタインの私的言語の話は内的な体験（感覚・感情・気分など）についての話である。つまり、内的な体験を指示するのに、「E」という記号を使うが、他人にはその意味が理解できないというものである。『クラテュロス』の話もアダムの話も私的言語の制作者が前提となっているのであるが、それは内的な体験ではない。アダムの場合で言えば、明らかにアダムが名前をつけたのは獣である。ウィットゲンシュタインの私的言語の話をも内的感覚以外にも拡大して考えれば、十分にアダムの話や『クラテュロス』の話にも通じるだろう。それは、ウィットゲンシュタインの私的言語の強調点を感覚体験から言語の公共性という視点に移せば、同じ類比として考えることができるだろう。

ウィットゲンシュタインの私的言語の話においては、私的言語は不可能ということである。その理由は、主観的正当化は正当化ではない、というからである⁷。したがって、「記号「E」には今のところまだ何の機能もないのである」⁸ということになる。しかし、アダムが獣に命名をした状況は、他人とのコミュニケーションを考えてはいなかったのであり、正当化は自分自身で行うしかない状況なのである。もしくは、『クラテュロス』の名前を制作した人というのは、事物を模写してそれに適った仕方で制定したことになる。この場合も制作した人自らが正当化を行い、他の者たちに広めていくという状況なのである。

⁶ Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, 1953, 1-258.

⁷ *ibid.* 1-265.

⁸ *ibid.* 1-260.

つまり、ウィットゲンシュタインの私的言語の状況とはかなり異なる状況なのである。ウィットゲンシュタインが私的言語は不可能であるという主張には、もう既に規約となってしまう言語が流布している状況なのである。当然、自分以外の他者が存在している状況であって、アダムの状況とは異なる。つまり、私的言語が不可能という主張は、言語について他者や公共性を前提にしている議論なのではないだろうか。アダムの状況では、他者や公共性を前提にする必要はないのであり、自分自身の正当化しか存在しないのである。

もちろん、言語の目的や機能を考えると、他者を想定しないわけにはいかない。そういう意味では、ウィットゲンシュタインの私的言語は言語の目的や機能について考慮されているのかもしれない。それでは、アダムは一体、何故、獣に名前をつけたことになるのであろうか。そもそも、アダムがコミュニケーションを意図していなかったことを考慮するならば、獣に名前むしろ固有名を名づけたことと考えれば、獣同士をそれぞれ区別するためだったと考えられる。それは、他人とのコミュニケーションのためではなく、自分のために名前をつけたと考えられないだろうか。それは、たとえ「理解していると思う声」⁹にしからずぎなくても、私的言語の可能性はここに多少なりとも残っているのではないだろうか。

5. おわりに

結局、指示されている対象とその名前の正しさの根拠は、見いだせなかった。『クラテュロス』での議論においても、名前の正しさは事物の本性を表しながら、ある程度、約束的・慣習的なものが混入しているという結論になり、結局は語の分析をしても、真実にはふれることができないというものであった。もちろん、真実にふれることができなくても、指示されている対象と名前の正しさの根拠が見いだされれば、この問題に関しては十分であろう。

しかし、それすらも見いだすことはできなかったのである。というのも、名前の正しさを言うためには、どのような言語観をもつことで変わってくるから

⁹ *ibid.* 1-269.

である。しかも言語をどのように捉えるかということによって、前提するものが異なっていることが明らかになったと思われる。もちろん、言語をどのような目的として捉えるかということによって、その機能が果たす役割も異なるであろう。したがって、言語の本質を公共的なものと捉え、他者とのコミュニケーションの道具として考えるのであれば、私的言語は否定されるし、私的言語の意味は失われることになる。そういう意味では、ウィットゲンシュタインの主張は正しいように思える。しかし、言語を他者とのコミュニケーション以外の目的に適うものとして捉えるならば、他の可能性も出てくるのではないだろうか。もちろん、私的言語の可能性も残されているかもしれないし、また、このことは正当化をどのように考えるのかという問題でもあるだろう。

(くばた しんいち／名古屋大学)